

## 今月のメッセージ（2014年4月）

日本銀行富山事務所長  
佐子 裕厚

### 富山電気ビルディング

「昭和33年の国体の時には、あのビルのバルコニーから昭和天皇が県民に向かって手を振られ、歓呼の声に応えられたのです」。知人の方に聞きました。

「あのビル」 富山電気ビルディング は、昭和11年4月に竣工。軍艦型をしたビルは、富山市中心部にあり、富山大空襲や富山水害にも耐え、今でもレストランや会議室、集会場として利用されています。内部の装飾にも竣工当時のものが多く残り、富山県民は愛着をもって「電気ビル」と呼んでいます。

ユニークな名前のこのビルの歴史を紐解くと、近代富山の発展に尽くした人々の熱い思いが感じられるのです。

富山電気ビルは、北陸電力の前身である「日本海電気」の本社ビルとして建設されました（なので「電力ビル」ではなく「電気ビル」なのです）。日本海電気の社長である山田昌作（1890-1963）は、米、絹織物、売薬などが主要産業だった明治・大正期の富山経済を重工業化するために、県外資本を積極的に誘致し、自社の利益を削っても誘致企業に割安な電力を供給し続けました。

電気ビルの創業に当っては県外資本も多く出資していますが<sup>1</sup>、これは、山田が県外資本の富山への定着を図るために出資を呼びかけたためと言われていません。事実、山田は、電気ビル竣工と同時に「富山社交倶楽部」を立ち上げ、地元資本と県外資本の交流の場を作りました。「富山社交倶楽部」は今でも電気ビルで活動を続け、県外資本の企業の多くは現在も富山で営業しています。

近代富山の発展に尽くした先人は他にもたくさんいます。

初代金岡又左衛門（1864-1929）は神通川水系を、浅野総一郎（1848-1930）は庄川水系を、それぞれ開発し、水力発電というインフラを富山に残しました。初代佐藤助九郎（1847-1904）は常願寺川などの治水工事を行い<sup>2</sup>、佐伯宗義（1894～1981）は「富山県一市街化構想」を標榜し鉄道網を整備しました。

私には、電気ビルが、こうした先人達の郷土愛のシンボルのように思え、事業家精神の大切さを思い出させてくれる記念碑のようにも思えるのです。

以 上

<sup>1</sup> 呉羽紡績、日本カーバイド工業、日本鋼管、日清紡績、日本曹達など。

<sup>2</sup> 佐藤が創業した佐藤工業は、吉村昭の小説「高熱隧道」のモデルになりました。